

# ジンメル的女性論の研究(五)

石 塚 勝 雄

## 十七の二

『正義(註)という理想に対する、倫理のおよび論理的な男女両性の差異は、一種独特なもつれ合いを展開している。私はかつて男が及ばないほどの倫理的な高みに達している婦人を何人か知っていた。しかし、特殊な徳目としての正義というものを彼女たちは持ち合わせていなかった。男にあっては、他の諸々の道德的性質がかれこれ問題になるような人でも、正義という徳はしばしば現われる。そうはいっても、婦人たちが何時も不正であるわけではなさそうである、これまでよくそういう愚かな主張がなされて来たけれども。多分彼女たちは統一ができ過ぎているために、男性的正義感の原因となっている無情熱の情熱を欠いているのであろう。けだし、この男性的正義感にあっては、正義の二つの動機である倫理的動機と論理的動機のうちで、後者が一般に心理上の優勢を保っているように、私には思われる。これに反し、女性的正義感とでも言うべきものを観察してみると、それはむしろ純粹に倫理的に方向づけられているのである。その証拠には、諸々の不正行為が彼女たちの感情をしばしばきわめて烈しく怒らせるのであって、それは正義が彼女たちを悦ばせる以上のものがあるのである。(註三)』

以上は倫理・道徳における男女差についてのジンメルの所論の補説で、特に正義(Gerechtigkeit)という徳目に

おける男女差について述べたものである。「一般に婦人は人柄は立派であるが、正義感には欠けている、または乏しい」というのが、この問題について考える人たちの通説と言ってよいであろう。よく「東洋人は女性的である」と言われるが、その「女性的」とは主としてこの事を指していると、筆者は考えている。つまり東洋人は賢くて、世渡り上手であるが正義感には乏しいという意味であろう。ユダヤのある文献にも「賢こき人は野苺いちじくの如くありふれたれど正しき人は見当らず」とある。以上の通説をショーペンハウアーも、J・Sミルも肯定している。

さて、ジンメルは以上の通説を一応肯定して、その実例として自分が接触した幾人かの婦人をあげている。一方男にあっては道德的に随分いかかわしいと思われる人でも、正義感だけはしばしば躍如として現われることもジンメルは認める。これは無名の男にも勿論現われることであり、有名人の実例をあげれば際限がないとしても、米国において人気がワシントンを上廻ると言われるリンカーン、日本では今なお持てはやされる「赤穂義士」などは典型中の典型とも言えようか。

しかし、ジンメルによれば、そうした通説は愚かな (törichterweise) 主張だという。そのわけは男性的正義感の観点から女性を考察した結果に他ならないからだという。けだし男性的正義感の特徴は、正義の二つの動機の中で、倫理的動機よりも論理的動機の方が心理的に優勢を保っているところにあるという。これと同様の論理構造はショーペンハウアーにも見られ、彼によれば倫理の基礎にあるものは憐憫 (Mitleid) であり、これは女性にも豊かに恵まれている。しかし女性には理性の視野が狭いために、憐憫 (同情) を論理的に展開して徳としての「正義」感を構成するところまで行かないのだと説明する。ジンメルの言う、女性に欠けている「無情熱の情熱」(die Leidenschaft der Leidenschaftslosigkeit) とは、論理的に構成された正義感の意であり、ショーペンハウアーと同様の論理構造であると言えよう。

要之、ジンメルによれば、男性的正義感の観点から女性を考察すれば、女性に男性的正義感のないのは当然の話で

ある。くり返し説いてきたように、女性は一統的存在であるから、「正義」においても純粹に倫理的に方向づけられている。その証拠には、女性的正義感是不正の事態に対する烈しい怒りとなって素朴的に爆發する形をとるという。以上ジンメルの所説は、女性における正義感の欠如という従来の通説に対する彼の弁明のようにも受けとれる。しかしジンメルにしてみれば、対象（女性）に即して観るという、彼御自慢の徹底的に即物的な物の見方の結果にすぎないのであり、ここにも女性の「心臓の鼓動」を聴き分けた彼の面目を見ることができよう。

（註一）『』に囲まれた箇所が、原文のままを拙訳した部分である。

（註二）G. Simmel, Philosophische Kultur, Potsdam, 1923, S. 92. 増訂版を入手したので本項を追加した。

## 十八

『しかし、以上のことと共に、ここではただ、女性は、その固有の存在（それは絶対的な女性存在であること）の中に、あらゆる自己以外のものを拒否して、深く埋没している存在である、ということだけを述べておこう。それと共に、よく女性の本質とされている単なる男との関係、その関係に対する女性の独立性をもう一度述べておこう。しかし、この独立性は同時に、女性たることが、その内的な絶対性にもかかわらず、性を超えた客観世界、すなわち自我に対立しているところの理論的世界、および規範的世界をうち立てることを、男性的原理に任せなければならぬことの根拠となっているのである。<sup>（註一）</sup>』

以上はなかなか難解のようであるが、最初の文章は、すでに再三述べてきた女心の閉鎖性（Geschlossenheit）（本研究七ノ四頁）と向自性（本研究、六の二五頁では Für-sich-Seiende, 七の四頁では Bei-sich-Sein）に対して別の哲学的表現を与えたものと解されるであらう。つぎの文章も、すでに再三述べてきたジンメルの言う素朴な仮説す

なわち「女は男との関係において初めて女性となるのであり、それ自身としては無である」(本研究五の二一頁、および六の二六頁)の反駁である。しかしここでは、その反駁に重点が置かれているのではなく、そうした男女の関係から独立しているところに、女性の本質があるとする主張に重点が置かれているのである。この女性の本質の独立性こそが、女性たることが、性を超えた客観的世界すなわち理論的世界および規範的(normative)世界をうち立てることを、男性的原理に任せなければならないことの根拠になっているのだと、ジンメルは言う。ここで、理論的世界および規範的世界をうち立てる(stiften)とはどういう意味であろうか。理論とは客観世界の法則のことであり、その世界をうち立てるとは客観世界の法則の認識のことであり、規範的世界をうち立てるとは、平易に言うて価値世界の創造(規範学)のことである。したがって、認識と創造とは男性的原理に任せ(überlassen)なければならないということになる。このこと、つまり認識と創造とは典型的女性にとっては無縁の事柄であることについては、すでにジンメルが詳論した通りである(本研究、八の八頁以下)。しかし、前の箇所では女性とは言わずに女性の典型と言ひ、この箇所では男性とは言わずに男性的原理(männlich Prinzip)と言っていることに注意したい。この二箇所を綜合すれば、認識と創造、平易に言つて科学と哲学(規範学)は男性的原理の領分に属するということがあり、この男性的原理は、大多数の男性と少数の女性(すなわち非典型的な女性)とに賦与されているということになるであろう。これは造物主の創造の原理が個物に対して貫徹していないことを意味する。これは何故であろうか。思うに、造物主(Nature)は女神と考へられており、妖しくも絢のある御方であつて、男性原理をすべての男に、女性原理をすべての女に賦与するというふうな千篇一律なことを好まない天衣無縫的な方だから、とても解釈するより他はないであろう。何れにしても、このジンメルの女性観は、「女に学問はいらぬ」とした日本封建時代の女子教育思想に対して、また「平凡な女は家庭の主婦となれ、有能な婦人は社会活動をせよ」と説いたJ・S・ミルの婦人解放論に対しても、有力な根拠を提供するものである。

『さてもう一度くり返して言うが、女における存在と性的存在との、まさに根本的な、いな絶対的一致が、通常の、男との関係という意味における性というものを、女にとっては第二義的なものとしてしまうのである。この関係が女にとってどれほど重要なものになるうとも、それはなんら変りがないのである。というのは、女の性は、かの絶対的なものの現象であり、この絶対的なものが性を實際に完全<sup>み</sup>に自らの中にとり入れているわけだからである。その根本的事実の成り行きはつぎの通りである。すなわち女性のすべての発現、つまり女性の本質のすべての現象や客観化は、普遍的に人間的なものとしてではなく、同時に特殊的に女性的なものとして感じられるのであって、性を超えたものとして純粹に即物的性格を持つものとして感じられる男性の本質の諸々の発現とは相対立するものである。男には、ある特定の外物へと向う内奥から発する方向線が欠けているが、女には、存在と女性的存在と一致によって、それが与えられているのである。したがって、男には、普遍的なもの、まさにそれとともに超主観的・即物的なものへのきわめて深い志向があるのである。あらゆる歴史的な力関係は、男の創造物に、客観的に決定するものの特権、つまり性的対立関係には触れていないのに即物的絶対性において性的対立関係を支配する特権を与えてきたので、それによって時の秩序の中でのみ男女の内的な性格学的差異をつけているのであるが、男や女にあってその本質総体の中に占める性的契機の割合がその性格学的差異を示しているのである。』<sup>(註三)</sup>

女としての存在と性的存在との絶対的一致、平易に言えば女はそれ自体が自己完結的な性的存在であること、それ故に男との関係という意味の性は女にとって第二義的なものにすぎないことは、すでに第五節で述べた。このようにして、女性の本質のすべての現象 (Erscheinungen) や客観化は内部の絶対的な性的なものの現われであるがために、それは一般人間的なものとしては感じ (empfinden) られずに、特殊的に女性的なものとして感じられる、というのがジンメル<sup>ジンメル</sup>の論述である。それは、男の本質の現われが、性を超えたものとして、純粹に即物的性格を持つものとして、感じられるのとはまさに相対立しているという。つぎに以上の男女の本質的な相違が外界の事柄との接触関係に

どのように違って現われているかについて述べているが、同様のことはすでに本研究第八節で詳論した。すなわちその箇所では、女は、彼女がその中に安らうている存在から離れないで、別言すれば女心の閉鎖性が開かれないうまま、事物との直接的な・本能的な・素朴的な接触をするというふう述べているが、ここでは、女には、ある特定の、外物へと向う内奥から発する方向線が与えられているのに、男にはそれが欠けており、その代り普遍へと向うきわめて深い志向があると述べている。以上をさらに平易に言えば、女は外界の個物への体当りの接触であるが、男は個物に宿る普遍を見るところという接触の仕方であると言えよう。

『あらゆる歴史的力関係…』をもって始まる以上引用の最後の文章は、難解であるが、筆者はつぎのように解した。まず『歴史的力関係』とは、ここでは人類の歴史における男性優位の力関係を指すもので、すでに本研究第三節で詳論したところである。この歴史的力関係は男の創造物（学問・思想・芸術など）に客観的・普遍的に決定されるもの（このことは前段で述べた）の優位性を与え、一方男女関係そのものは探究の対象とはなっていないのに、男の創造物一般の客観的（即物的）絶対性を理由として、男女関係の支配権をも男の側に与えてきた。このようにして、男女の本来的な性格学的差異も学問的研究の対象となることなく、ただ歴史的秩序（時の秩序も大体同義語と解する）の中から拾いあげられたもので構成されている始末である。このようにして、男女の性格学的差異を示しているものは、男女の本質全体の中に占める性的契機によるものの占める割合ということになっているのである。この性的契機の占める割合を考えて見るに、まず恋愛であるが、これも歴史的には女の方が強いように言われているようだが、男も熱烈な恋愛をすることもあるので、仮りに男女同じ割合とみても、男女の性的交渉となると、これは女にとって本質的意味を持つことは、すでに本研究第五節・第六節で述べた。その他女にとって性的契機と考えられるものに、妊娠・それに伴う身体の異常・分娩・授乳・育児など一連のものがある。なお、これらのことは家庭内で行われるので、主婦としての雑務も性的契機の延長とも見られよう。さらに、装飾・装身への欲求も、その現実の度合も、女性の方が甚

しいことは否定できまい。この装飾・装身の有力な心理的動機が性的刺戟手段（誘惑装飾）であることは、この方面の学者の認めるところである。<sup>(註四)</sup>なお、「男は度胸・女は愛嬌」とか、「女は恋愛と結婚が全部だ、男には他に別の世界がある」などに現われた女性観も女性を性中心の存在と見たものに他ならない。何れにしても、男よりも女の方が性的契機の占める割合が大きいことは事実である。要之、男女の性格学的差異は、未だかつて真に学問的研究の対象となったことはなく、「男性優位の歴史的力関係によって、男女の本質総体の中に占める性的契機の割合だけで示されている、というのがジンメルの所論である。

(註一) G. Simmel, *Philosophische Kultur*, Postdam, 1923, S. 93.

(註二) J. S. Mill, *The Subjection of Women*, Everyman's Library, 1955, p. 265.

(註三) G. Simmel, *op. cit.*, S. 93 ff.

(註四) 高橋義孝『近代芸術観の成立』新潮社、昭和四〇年、五八、六二頁。

## 十九

『さらにこのことが、典型的な男性の本質を概念に把えること、つまり定義することは、女性の本質を定義するのに比べて、論理的表現を見出すのを大変困難にしているのである。普遍的に人間的なものは（男女の特質はその一つの特例にすぎない筈である）、人間性一般に対する男性の特色をあげることができない程緊密に、男性という特例と結びついているのである。全く普遍的なものは定義され得ない。しかるに、ある性格を純粹に男性的なものとして挙げるとしても、より精密に観察するならば、それが常に、特殊的に女性的性格に対比的な差異を意味するにすぎないことが分るのである。ところで、この女性的性格は、その本質を男性的性格に対する単なる対比のなかに持っているのではなく、むしろ、一つの向自的存在・一つの向自的に決定するものとして、特有ではあるが、対立だけによって決決して決定され得ない人間性の一様式として感じられるのである。野蠻で無知な自己過大

評価の階層から最も崇高な哲学的思索の階層にいたるまで、男だけが本来の人間であるという古来の見解は、女の本質を定義することを、その概念的対極たる男の本質を定義することよりも、はるかに容易だとしている。だから、女性心理学は無数にあるが、男性心理学は一つすらもないのである。<sup>(註)</sup>』

前節の最後で述べたように、男性の本質には性的契機以外の部分が広汎に存在するために、その本質を定義することが女性の本質を定義することよりも、はるかに困難なわけである。卑近に考えても、男には職業別に見ても、政治家・実業家・学者・思想家・芸術家・作家・職人・サラリーマン・工場労働者・日雇等々無数の種類があり、その中から本質的共通点を抽出して定義することの困難さは理解できよう。しかもジンメルによれば、普遍的に人間なるものが男性という特殊例とからみついているので、男性そのものの特色を挙げることがますます困難となるわけである。つぎに述べていることは、女は「弱」と見ると男はその反対に「強」、女は「柔」と見ると男はその反対に「剛」というふうに決めてかかったりすることは、その「弱」なり「柔」なりの対極概念を対置しただけのことで、男性そのものを精密に観察した結果ではないというのである。

ところで、女性の本質の方も、男性の本質に対する単なる対比のなかにあるのではなく、そうした対立とはかわりあいのない独自の向自的存在であり、しかもそれが人間性の一様式として感じ (empfinden) られる、とジンメルは言う。このジンメルの感じ方は、「理想的女性とは理想的男性と性格が正反対のものだ」とする従来の女子教育思想<sup>(註)</sup>に対する反駁にもなっている。また再三述べてきた「女はそれ自体としては無であり、男との関係で初めて女性になる」とする素朴な俗説に対する反駁にもなっている。さらにジンメルが掲げている「男だけが人間である」とする古来の見解 (西欧語において男を意味する語が同時人間をも意味することに現われている) に対する反駁にもなっているわけである。その古来の見解が女性の本質を定義するのを容易であるとしているのは、前節で述べたように、女は本質総体の中に占める性的部面の割合が大であるために、女は性的存在だとか、女は生殖すなわち人類を継続・発



展させるための手段的存在（日本流に云えば「腹は借物」）だとか、世人を納得させ易い定義が容易にできるからである。また「男だけが人間である」とする古来の見解から、男性心理学＝人間心理学＝心理学という等式が成立し、特殊心理学として数々の女性心理学が生れているわけである。この中心論点を平易に言えば、「女の生き方も決して特殊な生き方ではなく、立派な一つの人間の生き方である」ということになるし、ここにも女性の「心臓の鼓動を聴き分けた」真のフェミニスト・ジンメルの面目が躍如としていえると言えよう。

『さらになお、男女両性の根深い差異が、心理的な表面的な現象に明らかに示されている。すなわち、平凡な普通の男をして女に興味を抱かせるものは、裁縫娘の場合でも王女の場合でも、大体同じものである。男女両性の定義が容易であるか否かのこのような関係は、男女両性の典型の代りに個人が問題にされるや否や逆になってしまふことは、直ちに理解されることである。すなわち、個々の男は個々の女にくらべて大体において叙述し易いものである。このことは、われわれの文化の言語概念の形成がすべて、男性の社会的優位のために、精神現象の男性的な着色に重点をおいているためばかりではない。種属としての女性は、概念規定を要求するに十分なだけの重要性をたしかに持っている。しかし、その個別化には言語形成が関与しなかったし、ここで問題になると思われる微妙なニュアンスが個々の女たちの心理的描写をしばしば拒んでいるので、彼女たちは男たちに自分を完全に理解させることができないのである。』<sup>(註三)</sup>

心理的・表面的現象として観察する場合、男は性愛の対象として女を眺めるので、女の肉体・容貌・愛嬌・色っぽさ等々に重点がおかれることになり、女の教養とか身分などは視野から遠のいてしまうから、相手が裁縫娘であるか王女であるかは問うところではないことになる。このことは、男女両性の根本的な差異が表面に現われたものとジンメルは言っているが、これはすでに第八節で述べた、男は「半ば獣、半ば天使」<sup>(けだもの)</sup>の前半が現象形態をとったことを意味するのであろう。女が男を見る目については述べられていないが、女の宿命は人類種族の発展（よい子を産むこと）

にあるので、相手の男の身体の他に精神的素質も大いに問題となるのであろう。

さてまた男女の定義の問題に移るのであるが、男を定義することは女を定義するのにくらべて大変むずかしい次第については、本節の初めからジンメルが再三述べてきた次第である。ところが個々の男を定義することは、個々の女を定義することよりもはるかに容易である、とジンメルは言う。全体を定義することが困難な場合は、個を定義することが容易であることは『直ちに理解される (ohne weiteres begreiflich)』とジンメルは言っているが、これは論理的に当然の帰結という意味に解される。平易に言えば、男は個人差が大きいから、共通点(本質)を抽出して叙述し定義すること自体が困難であるばかりではなく、その抽出された共通点(本質)なるものも、果して男の本質なのか、人間の本質なのかという新しい問題も出てきて、(本節の最初のところで述べたように人間の本質と男の本質が緊密にからみついているので)ますますもって男の定義はむずかしいということになる。ところが男は個人差が大きく、しかもそれが比較的明らかに露呈されるから、叙述し易いすなわち定義し易いということになる。そのうえ男性の社会的優位のために、人類の文化は歴史的には男性文化であり、その一部である言語形成も男性的思考用式の所産であり、したがって男性の個人的性格を叙述するのに用いる言葉も豊富にそろっているので、叙述もし易いということになる。一方女とは言っても、それはいわゆる人類の半分(an entire half of the human race)<sup>(註四)</sup>でもあり人類にとって必要不可欠の存在であることは自明であるから、これに対して男の立場からも何等かの定義を下す必要に迫られてきた。事実歴史的にも女に対する種々の定義・女性観が生れてきたことをジンメルも述べてきた次第である。しかし、女の個人差つまり個人個人の女の微妙な心理を描写する言葉は形成されていないために、女は体験的に自分の心のすみずみまで感得しながらも、それを表現する用語がないために、ついに男に自分を理解させることができないというのである。ここにも「女の心臓の鼓動」を聴き分けたジンメルの面影が偲ばれるのであるが、これほどまでに貫徹した物の見方の即物性こそは、彼の女性との精神的接触がいかに深かったかを物語るものと言えよう。

『なお、もっと深いところに、もう一つ別の関連事項がある。すなわち、種族全体としての女性が定義し易いという正にその理由で、個人としての女性は個人として男性よりも定義しにくいのである。すでに一般的概念が何か特殊なもの・差別的に規定されたものとして感じられる場合には、個別性がある程度まで全般的なものにかかわりを持っており、そしてそれに尽きているのである。したがって、それ以上の個別化にはもはや正しく余地も<sup>まさ</sup>残っていないのである。それ故に、女性の最も深い本質的特徴の現象形態は、つぎに述べる関連の中にある。すなわち、男性の場合におけるよりも女性の場合においては、はるかに多く全般的なものが、個人的・個性的なものの形式の中に生きているのである。典型的に完全な女性においては、多くの全く種族的なもの・本来非個性的なものが、何か全く個性的なものになっている。しかも、この個性的なものは、あたかも個性という唯一の点から初めてこの世界に出てくるかのように、内側から生み出されるのである。たしかに性愛関係よりも一般的な男女関係はない。男がそれを大概の場合そう感じて扱っているのに、その関係は女にとっては特に個人的運命であるように見える。女に生起する種族的な出来事ではなくて、内的にきわめて独自の生産性（創造性）のように見えるのである。』<sup>（註五）</sup>

種族全体としての男が定義しにくく、一方種族全体としての女が定義し易いという事の次第を、本節の初めからジメルは精緻な論理で述べてきた。今度は個人としての男または女を定義する場合は、その関係が逆になって、個人としての男を定義することはやさしく、個人としての女を定義することはむずかしいと言う。その概括的理由は、全体を定義することが容易であるという事は、当然に個物を定義することを困難にするという論理関係から来ていると言う。われわれは日常うっかりしているのであるが、哲学者に言われてみれば、たしかに個人としての女は個人としての男よりも説明しにくい。

その詳細な論理をジメルはつぎに展開する。人類社会では、女が事実上「人類の半数」を占めようと、一般概念としての「女」は、人間の中の特殊な存在として感じとられている。すなわち、男に性的サーヴィスを提供したり、

男の鑑賞物となったり、男に精神的慰安や家事労働を提供したり等々、一言でいえば、男のための手段的存在のように感じとられていると言えよう。したがって、そうした全般的な共通の観点から個人の女も眺められるので、それ以上深く立ち入って、女の個性などを問題とする余地も関心もないわけである。これは男が勝手に・恣意的にそう考えているだけではなく、事実女においては、一般的なものが個性という形式の中に生きている、とジンメルは言う。たとえば性愛関係(erotische Beziehung)なども、最も一般的な男女関係と男は感じて扱っているのに、それが女にとっては特に個人的な運命のように見えるという。これは中国の詩人白居易(白樂天)が「人生婦人なるなかれ、百年の苦楽他人に依る」と言ったことと結局は同じことを意味するのであろう。性愛関係とは客観的に見れば、人類種族の維持発展を図る普遍的大事件である。ところが女が恋愛し、生み、育てる様相を眺めると、そうした種族的大事件とはおよそ無縁な・きわめて独自の創造性(Productivität)のように見える、とジンメルは述べる。これをジンメルは女性的本質の中における普遍的なものの個性化傾向として、次項でさらにその論理が展開される。

『女性の本質の中における普遍的なものの個性化傾向は、(男の)女への関係をもとらえている。すなわち、女たちはしばしば、おそらく大抵は、正にその一般的特性の故に尊重されるのである。非常にしばしば、男は女を、その美しさ・愛らしさの故に愛する。簡単に言えば、ある性質の故に愛する。しかしその性質とは、時折の個性的な微妙な差異はあるとしても、他の女たちと共通に持っていて、その限りににおいて個性と同一のものでもなければ、個性と同一の性向を持ったものでもないのである。それ故に、男たちの方がより一層不誠実でもある。というのは、男たちの多くはプラトーンに従って言えば、ある個人の独占的愛を偏狭で奴隸的であると見なし、彼等の愛を美一般の「大海」へ注ぐものだからである。それにもかかわらず、そのような普遍的性質は女の個性と結びついているし、女性自身の感覚からしても、比較的緊密に、男におけるよりもさらに緊密に結びついているのである。それ故に、「美しい男」というものは、何か不快な自己矛盾として感じられる。すなわち、彼の美しさがある普遍的なも

のとして、彼の個性と結びつかないものとして作用する時に、そう感じられるわけなのである。』<sup>(註六)</sup>

ジンメルによれば、男が女を尊重し、愛するのは、美一般・愛らしさ一般がある個人の女に宿っているからであると言う。そうした美とか愛らしさとかいう性質(Eigenschaft)は、時たま個性美ともいふべき微妙な差異(Nuance)を示すことはあっても、本来は個性とは別のものであり、他の女と共通に持つでいる性質に他ならない。したがってその性質(美一般)の後退と共に男の愛も後退することになる。それは丁度、芸術作品の素材が腐朽してしまつて、その美的価値を喪失してしまうのと同様の論理と言えよう。だから男の方が不誠実(Untreue)だということになる。つまり、女の個性とか個人を愛したのではなく、女に宿された美一般の故に愛したのだから、こういうことになるわけである。これを日本では、「男心と秋の空」(Men were deceivers ever.)<sup>(註七)</sup>という。しかし、プラトール流にこの場合の男の本質を言うならば、多くの男たちにとっては、特定の個人の女を独占的に愛するなどということは、言わば「みみっちい」(偏狭で奴隸的)ことなのであり、常に男の愛は美一般の「大海」(weit Meer)に向けられるものだから、止むを得ないということになるわけである。男女関係から道義的要素を捨象するかぎりにおいて、このことは自然の趨勢として認めなければなるまい。

しかし、これにすぐつづけて、ジンメルは例の如く女性の立場を大いに代弁する。そうした普遍的性質(美一般)は個性とは別物であるとしても、女においては男におけるよりもはるかに緊密に個性と結びついている。本項の最初において「女性の本質の中における普遍的なものの個性化傾向」として述べたのがこれである。美一般と個性とを切り離して問題とするのが、男の行き方があるとしても、女においてはこの両者が事実上切り離し得ない関係にあると、ジンメルは言う。結局、典型的には男女はそれぞれ「己が道を行く」ことになり、この点からも男女関係はしっくりかみ合わないものであるということが言えそうである。

つぎに「美しい男」、日本流に言えば「のっぺりとした美男子」が、何か不快な自己矛盾的存在(美であるのに美

として感じられない」として、日本流に言えば何か頼りない存在として感じられることの理由を説明する。前述のように、男においては、女のようにには、美と個性とがとかく結びつかない。そのような美はその男の個性から浮き上がった人形のような普遍的な美であり、個性と密着した生きた躍動美を示さないからであると説明できるであろう。日本の川柳「色男 金と力は無かりけり」も、この間の消息を物語るものと言えよう。

(註一) G. Simmel, *Philosophische Kultur*, Postdam, 1923, S. 94.

(註二) J. S. Mill, *The Subjection of Women*, Everyman's library, 1955, p. 232.

(註三) G. Simmel, *op. cit.*, S. 94 ff.

(註四) J. S. Mill, *op. cit.*, p. 296.

(註五) G. Simmel, *op. cit.*, S. 95.

(註六) *ibid.*, S. 95 ff.

(註七) 反対に「女心と秋の空」(A woman's mind and winter wind change oft.)もある。しかし、筆者は「男心と秋の空」の方をとる。というのは、道徳一般については男の方が誠実であるが、男女関係については男の方が不誠実と見るからである。

## A Study of G. Simmel's View of Womanhood (5)

### Résumé

It is said that woman is superior to man in personality, but inferior in a sense of justice. However, according to Simmel, the above mentioned saying comes from man's view of sense of justice.

Man lacks a direction, which springs from his inner part, towards a fixed external object. However, woman is endowed with that direction through the unity of her being itself and her femininity. Therefore, there lies in man the profound intention towards universal, super-subjective things.

The definition of male's intrinsic nature is more difficult than that of female's. But the definition of an individual female is more difficult than that of an individual male, because the definition of female as genus is easier than that of male as genus.

An individualization of the universality which lies in female's intrinsic nature, for example, her beauty, her charm is the standard of her estimation by male. On the contrary, the beauty of an individual male is perceived as an unpleasant self-contradiction, when his beauty is identified with universal beauty, not with his individuality.